教育相談場面で語られる「ふつう」の意味
The Meaning of “Futsu” Narrated in Educational Counseling Situations

生井　裕子 IKUI, Yuko
● 桐朋学園女子部門
Toho Gakuen Joshi Bumon

佐野　予理子 SANO, Yoriko
● 清泉女学院大学
Seisen Jogakuin College

黒石　憲洋 KUROISHI, Norihiro
● 日本教育大学院大学
Japan Professional School of Education

Keywords ふつう，教育相談，保護者，こだわり，評価
“Futsu”, educational counseling, parents, obsession, evaluation

ABSTRACT

日本人にとって，「ふつう」であることは，他者との関係性構築において望ましい特性であるとされている。しかしながら，「ふつう」という言葉はその用いられる文脈によって意味合いが異なるため，本研究では「ふつう」の用いられる様々な文脈を検討することを目的として，教育相談場面の発話を取り上げて質的分析を行った。その結果，クライエントにとっての「ふつう」という言葉の意味を，以下の四つのカテゴリーに大別することができた。（1）保護者の考える人並みの「ふつう」にこだわることや，（2）他者からの「ふつう」評価に囚われることは，「ふつう」を巡る焦燥感や傷つきといったネガティブな感情につながっており，（3）保護者の高い基準を重視し，「ふつう」を軽視することは子供への否定的対応につながっていた。一方で，（4）「ふつう」を肯定的に捉えなおし，価値を置いている場合は，「ふつう」を肯定的に捉え，子供を尊重して関わっていることが示された。

The purpose of this research is to understand the meaning of “Futsu” for parents who come to educational counseling, by means of a qualitative approach. Based on the interview records of 9 parents, their narratives about “futsu” are categorized into the following four categories of persons who: (1) believe that being like others (being “futsu”) is most important, and force it upon their children, (2) are forced to accept the “futsu” values of other people, (3) believe that their own values are superior to “futsu”, (4) are relatively positive about “futsu”. It seems that the “futsu” values observed in category (1) and (2) tend to arouse negative feelings like anxiety, and possibly leave their children with mental scars. Parents in category (3) tend to have negative feelings about their children, because most children already share with friends and/or teachers “futsu” values, which usually conflict with parents’ ones. In contrast, parents in category (4) accept and respect their children just the way they are.

1．問題と目的

日本人にとって，他者との関係性が自己の精神的健康に及ぼす影響が欧米諸国と比較して大きいことが，従来から指摘されている。東洋においては相互協調的人間観が優勢であり（Kitayama&Markus, 1991），他者からの受容観が主観的幸福感に影響する（Kitayama& Markus, 1994）と言われる。すなわち，日本人の精神的健康には他者との関係性の概念が重要な位置を占めていることが示唆されている（遠藤, 1995）。

このように，日本人は周囲の他者との関係性の調和を重視するため，他者と変わっていないこと，すなわち「ふつう」であることを志向すると言える（大橋・針原, 2000）。元橋（1993）は，日本人は周囲から外れることを避け，「ふつう」を求めて周囲と同等にふるまうことを心がける傾向があると指摘した。また，大橋・山口（2005）は，人々が考える「ふつう」の人の特徴として，利他性が高く自己主張する能力にやや欠けるという像を描いた。その特性は，日本で重視される周囲の他者との良好な関係の維持に役立つ特性であることが示唆されている。

また，近年では「ふつう」であること自体の良さやポジティブな面に焦点を当てた実証研究が重ねられてきた。佐野・黒石（2005）によると，独自性欲求が低い場合に，自分を「ふつう」であると捉える認知（「ふつう」認知）の高さが，孤独感の高低を規定する要因であることが示唆されている。また，自分を「ふつう」であると捉えることは，安静状態を高め，否定的感情を低くする（佐野・黒石, 2009a; 黒石・佐野, 2009）。すなわち，日本人は周囲の他者と比較して「ふつう」である時に安心感を得る（佐野・黒石, 2009b）といえる。

その一方で，岩宮（2007）は，現在の社会における「個性を伸ばす」「個を大切に」というスローガンの中，いわゆる「ふつうの子」に満足せず，わが子の「ふつう」を認めたくない親が増えていると指摘している。しかし，「ふつう」であることと「個性的」であることの間には葛藤も生じやすく（岡田, 2007），「ふつう」と「個性的」を両立出来なくなった時に，子供が突然の問題行動に至ることがある（岩宮, 2006）。春日（2006）も，「ふつう」と「ふつうでない」の演じ分けに失敗すると，罪悪感や恥といった感情を生起しやすいことを述べている。また，第一筆者は公立の教育相談センターにおいて，心理面接を行っているが，そこでの面接では「ふつう」を巡るクライエントの傷つきや悩みが語られることが多い。

このような意味で「ふつう」という言葉には，ポジティブな側面もネガティブな側面も内包されており，「ふつう」が指している内容は個人によって大きく異なると考えられる。よって，「ふつう」の意味を検討していくに当たり，「ふつう」という言葉が用いられる様々な文脈について検討する必要があると言えよう。そこで本研究では，教育相談場面における調査と分析を通じて，「ふつう」という言葉が持つ意味を描き出すことを目的とする。

2．方法

2．1　調査対象者

都内の公立教育相談センターで継続面接を行ったクライエントのうち，「ふつう」について言及した保護者９名（母親）の語りを分析の対象とし，口頭で研究協力への依頼を行い，了承を得た。面接期間は４ヶ月～２年半，平均期間は14.4ヶ月であった。子供についての主訴の分類は，家族関係５名，不登校３名，学校生活３名，発達障害１名，行為障害（抜毛）１名（重複あり）である。

2．2　手続き

分析にあたって，筆者が面接中・面接後に作成した記録から，クライエントが「ふつう」という言葉及び類義語を用いて語った発話を抽出した。発話は全部で38個抽出された。

分析データの概念化に当たっては，まず第一筆者が該当データより概念化したものを提示した。その後第二・第三筆者と協議し，データに対する概念化が適切かどうかのチェック，修正等を行った。それをもとに再び第一筆者が概念化を行うというプロセスを繰り返した。最終的に「ふつう」の捉え方によって発話を４つのカテゴリーに分類することが出来た。

3．結果

3．1　「ふつう」の捉え方による分類

「ふつう」の捉え方によって分類された４つのカテゴリーは，表２の通りである。

表1　クライエントの子供の学年と主訴概要

子供	校種（学年）	主訴概要
A男	小学校（低）	注意欠陥傾向
B男	小学校（低）	自己主張困難　子供との関わり方
C子	小学校（低）	友人関係、登校しぶり　子供との関わり方
D男	小学校（中）	学校での離席、家族からの暴力
E男	小学校（中）	不登校、家族からの暴言
F子	小学校（中）	学業不振、反抗　子供との関わり方
G男	小学校（高）	広汎性発達障害、不登校
H男	中学生	抜毛、家族からの暴力
I子	高校生	友人関係、不登校経験　子供との関わり方

表2 「ふつう」の捉え方による分類カテゴリー

カテゴリー	発話例	人数	発話数
① 人並みの「ふつう」にこだわる	・まわりの子より出来ていないと不安。将来いじめられるかも ・人並みに出来るよう，家で苦手なことをやらせている ・みんな順調なのに，何でうちだけ？せめて人並みだったらいい	6	16
② 他者からの「ふつう」評価に囚われる	・医者からこの子は「ふつう」になりませんと言われてショック ・担任から「お子さんはふつうじゃないかもしれない」と言われた ・ママ友から「大きいのに出来ないのね」と言われ傷ついた	5	7
③ 高い基準を強いて「ふつう」を軽視する	・父親は，世の中の一般的な人を軽蔑しているのかもしれない ・人にどう思われるかというのを気にしなくてもいい ・自分の子だから出来て当然という思いがある	3	9
④「ふつう」を捉えなおし肯定的な価値を置く	・子供らしく，ふつうになった ・世間に身を置けるようになった	3	6

●人並みの「ふつう」にこだわる

一つ目のカテゴリーは，保護者が自分の子供をまわりの子供たちと比較して，人並みであるという意味での「ふつう」を子供に押し付けるといった発話の特徴から，「人並みの『ふつう』にこだわる」と命名した。6名の保護者の発話がこのカテゴリーに分類され，発話数は16だった。

発話例の一つ目にある，A男の母親による発話は，このカテゴリーにおける典型的な発話である。A男の学校での様子を見て，周りの子よりも学習や行動のペースが遅いことに母親が不安を感じ，「将来いじめられるかも」という焦燥感に襲われた結果，家でA男に対して口うるさく叱責したり，過剰に関与することにつながっている。また，B男の母親による二つ目の発話でも，引っ込み思案で友達にからかわれやすいB男のことを母親が不安に感じ，本人に自信を持たせたいという思いから「人並みに出来るよう，家で苦手なことをやらせている」というスパルタ的関与を行っていることが語られた。また，Ｉ子の母親は，Ｉ子について昔からずっと変なところがあると思っていて，ありのままの姿を受け入れられなかったと話しながら，「みんな順調なのに，何でうちだけ？せめて人並みだったら…」と発話し，不安の裏返しでついガミガミと叱ってしまう自分を振り返りながら，I子をそんな風に育てたのも自分，と母親としての自信のなさや劣等感についても語っていた。

このカテゴリーの発話は，自分の子供がまわりの子に比較して出来ていないと母親が感じることで，将来いじめられるかもしれない，疎外されるかもしれないという不安や焦燥感と共に語られる傾向があった。他の子と違っていることが将来いじめにつながるかもしれない，という発話は，「ふつう」にまつわる発話の中で最も多く聞かれたものであり，このような不安が保護者から見て子供が「ふつう」であることにこだわる心理につながっているようである。

●他者から見た「ふつう」に囚われる

二つ目のカテゴリーでは，保護者は子供のことをどこかで「ふつう」と捉えていたが，周囲の他者から「ふつうじゃない」と指摘されたというエピソードについての発話が捉えられた。そこで，このカテゴリーを「他者の『ふつう』評価に囚われる」と命名した。5名の保護者の発話が分類され，発話数は7だった。

一つ目の発話例はG男の母親によるものであるが，G男が広汎性発達障害の診断を受けた時に医師から告げられた言葉が「この子はふつうになりません」というものであった。その言葉は，母親にとってかなりの衝撃であり，子供に対する見方が大きく揺らぐ体験となっていた。また，二つ目の発話でも，C子の母親はある日担任から突然「お子さんはふつうじゃないかもしれない」との連絡を受け，戸惑いを感じたと語っている。

このカテゴリーの発話は，他者から「ふつうじゃない」という言葉をかけられたことが，ある意味レッテルを貼られたかのような体験となり，それまで子供を「ふつう」と捉えていた見方が揺らいだことが傷つきやショックにつながった様子が伺えた。

●高い基準を強いて「ふつう」を軽視する

三つ目のカテゴリーは，「ふつう」を低い基準として捉え，「出来て当たり前」といった高い基準を重視する発話が分類された。カテゴリー名は「高い基準を強いて『ふつう』を軽視する」と命名した。3名の保護者の発話が分類され，発話数は全部で9だった。

一つ目の発話例で，H男の母親は，H男の父親はエリートであるがゆえに，一般的な人，すなわち「ふつう」の人を軽蔑しているのではないかと語り，その意識が，二つ目の発話にある子供に対しての「出来て当たり前」という高い期待に結びつき，子供の「ふつう」を認められずに暴力につながってしまうのではないか，と語っている。

このカテゴリーでは，保護者の高い基準を重視して子供と関わることで，子供に対する否定的対応につながっているという発話が捉えられた。

●「ふつう」を捉えなおし肯定的な価値を置く

四つ目のカテゴリーでは，上記3つのカテゴリーとは異なり，「ふつう」であることに価値を置き，肯定的に自己や子供について語る時の発話が捉えられている。3名の保護者の発話がこのカテゴリーに分類され，発話数は6だった。

発話例の一つ目を語ったG男の母親は，発達障害と診断された子供と関わる中で，それまでの自身の価値観を大きく変化させ，子供の有り様を理解し，本人のペースを尊重しつつも社会との接点も失わないように心がける，というスタンスを模索してきた。そのプロセスの中で，「自分にとって大切だと思える友人を作れるようになった。世間に身をおけるようになった気がする」との発話が語られた。自分を支える，大切な友人を作ることができるようになったという変化が語られると共に，発達障害の子供を持ちながらも「世間に身をおける感覚」という「ふつう」を捉えた新たな感覚が語られるようになっている。母親自身の，子供や周囲への関わりのスタンスが周りと調和したと感じられた時に，率直な喜びや自己への信頼も同時に感じている様子であった。

このカテゴリーでは，子供の問題行動や母親の不適応感が，良い方に変化したという報告が，安心感と共に語られる発話が捉えられたのが特徴であった。

4．考察

4．1　教育相談場面でのクライエントの「ふつう」の捉え方

本研究の結果より，教育相談場面における「ふつう」という言葉は，クライエントの適応のあり方と深く関連して使われていることが明らかになった。

一つ目のカテゴリーでは，「ふつう」を子供に押しつけることの背景に，子供が将来いじめられるのではないか，疎外されるのではないかといった親の不安や劣等感，焦燥感といったネガティブな感情が強く関わっていることが示唆された。高良（2006）は，母親の抱く「ふつう」像は，社会からの期待と個人の志向の相関関係であると述べた。母親の持つ不安感や劣等感，焦燥感の根底に，社会からの期待をどのように取り込んできたのか，という側面も非常に大きな影響を及ぼしていると考えられる。母親自身が抱える強い感情的負荷をおろしつつ，「ありのままの子供」の姿を認めていけるような心の余裕を取り戻していくこと，また母親自身の持つ「ふつう」像を問い直していく関わりが必要とされるであろう。

二つ目のカテゴリーでは，「ふつう」評価を他者から押しつけられることによって，傷つきやショックを受けるという捉え方が明らかになった。日常生活において，「ふつう」と「ふつうじゃない」の境界はそれほど明確ではなく，母親にとってもわが子の行動に困っていることはあっても，それを「ふつう」「ふつうじゃない」という枠組みでは捉えていない。「ふつうじゃない」という評価をネガティブな文脈で受けることの傷つきは大きく，そのこと自体が教育相談への来談に至るきっかけとなっているケースもあった。その傷つきをともに受け止めながら，「ふつうじゃない」というレッテルを貼ることで子供への理解を終えることなく，どのような面に困っているのか，どのような面は優れているのか，といったより詳細な子供像を描き，子供への新たな理解を深めていくプロセスが必要とされる。

三つ目のカテゴリーにおける，保護者の高い基準を重視し「ふつう」を軽視するという態度は，その人の周囲にとって強引かつ理不尽な振る舞いとして受け取られる場合がある。保護者がそのように振る舞ってしまう背景には，子供を「どうせふつうじゃないから」「この子には無理だから」という，子供に対する要求や期待の挫折がある様子であった。このカテゴリーの発話が見られた前後には，子供とのコミュニケーションのやり取りが上手くいっていないというエピソードが語られることが多かったため，子供の気持ちや要求をいかに理解するか，その気持ちを理解しながら親の気持ちや考えをどう伝えるか，といった方向での，心理教育的な関わりが必要かつ有効であろうと考えられる。

四つ目のカテゴリーについては，「ふつう」を捉えなおし，肯定的な価値を置くという発話であった。すなわち，子供にとって問題となっていたことが一定程度解消し，子供の状況が落ち着いたことを指して「ふつうになった」と評価されることもあれば，母親自身が「ふつう」を模索し，「ふつう」の捉え方を徐々に変えていったことで「ふつう」を肯定的に捉えられるよう変化してきた側面も捉えられた。

４．２　今後の課題と展望

本研究は教育相談という場において出会った少数事例の分析をもとにしており，得られた結果は限定的な知見ではある。しかしながら，教育相談を訪れる保護者にとっての「ふつう」の捉え方を描き出し，そこに様々な機能があることを明らかにしたという点で，意義があったものと思われる。ただし，本研究では発話の分析にとどまっており，個人の内的状況や面接プロセスにおける変化までは扱っていない。そのため，今後は事例研究などを通じた質的検討を重ね，クライエントにとっての「ふつう」という言葉の持つ意味の変化を明らかにしていきたい。また，健常群との比較において，「ふつう」認知に違いが認められるのかといった分析を通じて，日本人の「ふつう」の捉え方に対する更なる検討が望まれる。

引用文献

遠藤由美（1995）. 精神的健康としての自己をめぐる議論. 社会心理学研究, **11**, 134-144.

岩宮恵子（2006）.「ふつうの子」を見直す. 児童心理, **60** (1), 2-11.

岩宮恵子（2007）. フツーの子の思春期ー心理療法の現場からー. 岩波書店.

春日武彦（2006）. 何がふつうで何がふつうでないのか. 児童心理, **60** (1), 37-42.

Kitayama, S. & Markus, H. R. (1994) *Emotion and culture: Empirical studies of mutual influences*. Washington, D.C.: American Psychological Association.

黒石憲洋・佐野予理子（2009）.「ふつう」であることの安心感（２）：集団規範からの逸脱という観点から 教育研究, **51**, 43-54.

Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991) *Culture and self; implication for cognition, emotion and motivation*. Psychological Review, *98*(2), 224-253.

元橋豊秀（1993）. 人並み志向と平準化志向　社会心理学研究, **9**(1), 1-12.

岡田珠江（2007）. 教育臨床心理における個別性と一般性（酒木保（編）『人間科学における個別性と一般性』ナカニシヤ出版）101-113.

大橋恵・針原素子（2000）. 自分を「ふつう」だと認知することは自己評価を高めるか？日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 20-21.

大橋恵・山口勤（2005）.「ふつうさ」の固有文化心理学研究：人を形容する語としての「ふつう」の望ましさについて　実験社会心理学研究, **44**(1), 71-81.

佐野予理子・黒石憲洋（2005）. 独自性欲求および「ふつう」認知が精神的健康に及ぼす影響　教育研究, **47**, 61-66.

佐野予理子・黒石憲洋（2009a）.「ふつう」であることの安心感（１）：集団内における関係性の観点から 教育研究, **51**, 35-42.

佐野予理子・黒石憲洋（2009b）. 日本におけるふつうの意味-自己改善動機の観点から-　対人社会心理学研究, **9**, 63-71.

高良聖（2006）. 虐待する母親への心理面接 ーセラピストの留意したことー　明治大学心理社会学研究, **1**, 12-25.

註）本論文の内容の一部は，日本発達心理学会第24回大会において発表されたものである。